町立図書館 町史だより

世界に広がった県産品

みなさんは「アダン葉帽子（別名パナマ帽）」をご存知ですか。左下写真の男性が被（かぶ）っている、※アダンを原料として作った夏帽子の呼び名です。一九〇〇年初頭に製造方法が考案されてから、県内で原料を調達できることと、当時の生活苦から、副業（ふくぎょう）としてまたたくまに製帽業が広がっていきました。

産業の盛り上がりとともにアダンが乱伐（らんばつ）され、原料不足に陥（おちい）ることもありましたが、紙撚（こよ）り※を代用して生産が進められました。沖縄県で作られた製品の約七割は、神戸の商人を通して欧米諸国に輸出されました。大正七年には年間一五〇万円（現在では約九億円）の生産高があり、砂糖に次ぐ特産品にまで成長しました。

明治四十二年の琉球新報には「西原村品評会」のようすが掲載されており、「中頭郡において、おそらく初めて大甲帽（だいこう）（アダン葉帽子）が出品された」とあり、西原でも製帽業が盛んだったことがうかがえます。

実際に、小那覇で帽子作りにたずさわった方の話によると、結婚前の若い女性が集まって作業をし、納期が迫ると徹夜で仕事をしたといいます。仕事をしながら歌をうたったり、ムヌアカシェー（なぞなぞ）をしたりと、楽しみながら帽子を作りました。

そんな製帽業も、日本が満州事変や日中戦争といった中国侵出によって国際的に孤立していくと販路（はんろ）を失い、次第に衰退していきました。

明治末から昭和初期の一時期のみに栄えたアダン葉帽子でしたが、沖縄の女性が心を込めて作った帽子は、世界へと広がっていきました。

アダン葉帽子を被る男性
（安谷屋隼裕氏提供）

※アダン…海岸に生えるトゲのある植物
※紙撚…細く切った紙を紐状にしたもの